



医療法人社団順心会 順心病院

救急患者を24時間受け入れ、 脳疾患治療の中核を担う

兵庫県加古川市 医療法人社団順心会 順心病院 理事長 栗原 英治 先生

順心病院は脳疾患の救急患者を「24時間365日、断らない」という方針を掲げており、脳血管外科手術の件数では兵庫県で有数の実績を誇ります。1年間の救急受け入れ件数は約3,600件。2005年に理事長に就任した栗原英治先生は、2012年に新病院を完成させ、充実したスタッフと設備によって地域における脳疾患治療の中核を担っています。

■“ハイブリット手術室”で充実した脳疾患治療を実施

1981年に開設された順心病院（174床）では、脳神経外科の専門医である栗原先生の赴任に合わせて1996年に脳神経外科を標榜し、救急患者を積極的に受け入れてきました。現在では脳神経外科医と救急専門医が常待機し、救急患者をスムーズに治療できる体制を整えています。搬送から30分以内に開頭手術を始めることも可能です。同院に救急搬送される患者さんの多くは脳梗塞で、t-PA（血栓溶解療法）の他、脳血管バイパス手術や、頸動脈内のブランクを取り除くCEA（内臓剥離術）などの手術を行っており、脳神経外科手術は年間800件以上の数を手掛けています。栗原先生は、「医師だけの努力では、『24時間365日、断らない』ことは難しかったでしょう。看護師などのスタッフが共に頑張ってくれるからこそできることです。患者さんから、『頼れるのは順心病院しかない』と言われることも多く、その期待に応えていきたいですね」と話します。



栗原先生は週3回ほど手術を行っています。

年に約100件実施している脳動脈瘤開頭術は、ほぼ全て先生の執刀です。



「ベッドで横になる患者さんの気持ちを少しでも慰めたいと、患者さんが見ることの多い天井は空をイメージした模様になりました」と栗原先生は話します。

同院は新築移転を機に“脳卒中センター”を開設し、救急患者への対応がより充実しました。脳神経外科手術と脳血管内治療が一つの部屋で行えるようにCTを手術室に設置した“ハイブリット手術室”をつくった他、救急を受け入れる入口から検査室、手術室までの動線を一本化するなどの工夫をしています。「脳卒中の治療は時間との勝負です。時間のロスを減らし、迅速に治療を始めることを念頭に、新病院の設計を練り上げました。救急患者への対応が万全になったと考えています」と栗原先生は自信をのぞかせます。

■高度な救急医療をめざした院内外での取り組み



院内の敷力所に“病院アート”として芸術作品が飾られています。患者さんの心を和ませ、希望を持ってもらいたいという思いがこめられています。

脳疾患の患者さんには、術後のリハビリテーションなど、多くのサポートが必要になります。そのため同院では、脳神経外科やリハビリテーション科の医師を中心に、看護スタッフや理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、地域連携担当者などがチームを組んで、高度な専門医療を展開しています。週2回、全症例の検討会を行い、患者さん一人一人に合わせた治療方針をスタッフ全員が共有し、円滑で早期の対応ができるようにしています。「検討会により、多くの意見を交わす機が増えることは、スタッフにとっては研修にもなります。診る力が養われ、スキルアップにつながっています」と栗原先生は評価しています。より高度な救急医療を実現させる取り組みは院内だけにとどまりません。救急隊員と月1回の症例検討会を行って連携を深めています。搬送時の状態やその後の検査結果、治療について報告し合い、運び方は良かったか、判断は正しかったかなど、さまざまな意見を交わします。また、救急隊員に手術を見学してもらい、病院での治療について理解する機会も設けています。「これらの取り組みにより、救急隊員のレベルが向上し、搬送がスピードアップしました。患者さんを病院にただ運ぶのではなく、治療の一端を担う一人であるとの認識を持って患者さんに親身に接するようになりました」と栗原先生。救急隊員と病院のスタッフとのコミュニケーションも深まったそうです。「脳卒中は地域全体で治していくべき疾患です。地域の医療機関

と連携して発症時から看取りまでをサポートし、患者さんが安心できるシステムをつくっていききたいですね」。地域の人々の命や健康を守るため、栗原先生はさらに充実した医療システムの構築をめざしています。



リハビリ室のベランダには、患者さんがリハビリの一環として育てている植物があります。同院では脳疾患の患者さんに対し、入院直後から機能回復のための訓練を開始し、早期の社会復帰をめざしています。

（2013年9月取材）